

原 著

ヴァインランド精神薄弱者施設草創期における総合的施設から
教育・訓練専門施設への転換とその意義
—創設者S. O. ギャリソン施設長時代 (1888-1899)—

本問 貴子・高野 聡子・宮内 久絵・長塚 修一・佐々木 順二

ヴァインランド精神薄弱者施設は、第二代施設長E. R. ジョンストン時代に、教育心理学者で家系研究とビネ知能検査で著名となりつつあったH. H. ゴダードを招聘し研究部門を創設するなど、20世紀前半のアメリカ合衆国を代表する施設である。当施設は、1888年にニュージャージー州最初の精神薄弱者施設として、S. O. ギャリソンによって創設された。ギャリソン施設長は、彼の寄付金活動によって施設を創設し、教育・訓練機能を重視しながら、あらゆるニーズを抱えた子どもを包括的・総合的にケアした。だが、入所者数の増加が問題化し、教育・訓練、医療の経験とその蓄積によって対象児の見直しが起きると、施設はしだいに教育・訓練機能の衰退を危惧するようになる。また、衰退化への危惧とともに、設立当初からあった施設財政面における州との緊張関係とによって、施設は施設機能の分化を構想し、教育・訓練専門施設への転換を目指していく。一方、施設は法人施設であるゆえに、きわめて小規模な小舎制の採用、医師ではなく精神薄弱児教育・訓練の経験者であるE. R. ジョンストンの招聘に見られるように、自主性と柔軟性に富んだ施設運営も展開する。

キー・ワード：ヴァインランド精神薄弱者施設 S. O. ギャリソン 施設内自立
総合施設 教育・訓練専門施設

I. はじめに—研究の課題と方法

1. 問題の所在と本研究の課題・目的

19世紀末のアメリカ合衆国の精神薄弱者施設は、創設期の白痴学校時代の教育単一機能から、収容・保護部門の拡大と大規模隔離施設への転換を確立していく。そのような時期である1888年、ニュージャージー州では、S. O. ギャリソン (Garrison, Stephen Olin 1853-1900) によって同州最初の精神薄弱者施設、ヴァインランド精神薄弱者施設 (The New Jersey Home for the Education and Care of Feeble-Minded Children. 以下、ヴァインランド施設) が創設される。

20世紀前半のヴァインランド施設では、第二代施設長E. R. ジョンストン (Johnstone, Edward Ransom 1870-1945) が、先駆的な精神薄弱施設の運営方針・内容を展開した。とりわけ彼の代表的な実績は、1903年に特殊学級の教員養成のための夏期学校を開設したこと、1906年に施設内に研究部門を設置し、教育心理学者でビネ知能検査と家系研究とともに著名となりつつあったH. H. ゴダード (Goddard, Henry Herbert 1866-1957) を部門長に招聘し、心理学、教育学等の科学的な精神薄弱研究を進めたことである。

そのため、これまでのヴァインランド施設に関する研究の多くは、ジョンストン施設長時代

について検討されてきた。例えば、米田ら(2005)は、ヴァインランド施設内で開設された夏期学校での特殊学級教員養成プログラムの内容とその意義について明らかにしている。また、トレントは、ヴァインランド施設を精神薄弱脅威論時代における家系研究とビネ知能検査の拠点施設として挙げている(トレント[1997b], 43-82)。

また、ジョンストン時代の施設は、同時代のわが国の精神薄弱児教育などとの関係を残している。例えば、わが国の児童研究所の創設者の一人でビネ知能検査の日本改訂版を発表した久保良英(1883-1942)¹⁾や、藤倉学園の常任理事・施設長であった川田貞治郎(1879-1959)²⁾が、同施設に訪問、滞在している。

一方で、初代施設長ギャリソン時代からジョンストン時代までの施設については、McCaffrey(1965)の学位論文がある。彼女は、ギャリソンが州立てんかんコロニー創設に携わったこと、施設内自立を目ざしたヴァインランド・プランを構想・実現したことなど、草創期のヴァインランド施設について明らかにした。だが、それらがいかなる意義を持っているのか、あるいは他施設との比較に基づいての検討は課題となっている。

そこで本研究では、草創期のヴァインランド施設の機能とその意義について明らかにすることを目的とする。本研究で解明すべき第一の課題は、施設創設期に見られる入所者の障害程度および家族の社会階層の多様性、そして入所者の年齢の変化に対応した総合的機能の実態である。また第二の課題は、いかなる理由から1890年代後半にこの総合的機能が挫折し、どのような機能をもった施設へ転換しようとしたのか、その理由は何かについて解明することである。

2. 研究方法

本研究の課題を解明するための具体的な観点として、施設創設の理念、対象、教育・訓練、医療、財政を設定する。施設創設の理念については、ギャリソン施設長の創設に至るまでの動機もあわせて検討する。対象は、ヴァインランド施設の入所者とする。教育・訓練と医療は、

当施設で実施された内容と方法を、同時代の他施設と比較しながら分析する。財源は、州からの補助費と当施設への寄付金とする。

検討時期は、施設が創設された1888年以前から1899年に設定する。その理由は、1888年の施設創設以前からギャリソンが施設創設の準備に取り掛かっていたからである。また、1900年には、ギャリソン施設長が死去し、ギャリソン時代が終結するからである。

本研究の資料は、上記の課題を解明するために最も基礎となるヴァインランド施設の年次報告を主に使用する³⁾。なお、本論文は歴史的研究であるため、現在では使用されていない精神薄弱、白痴、痴愚等を歴史的用語として使用する。

II. S. O. ギャリソンの創設構想と総合機能(1889-1890年代半ば)

1. S. O. ギャリソンの創設動機と創設理念

(1) S. O. ギャリソンの創設動機

ヴァインランド施設の初代施設長は、聖職者 S. O. ギャリソンである。彼は、1876年にコネチカット州のウェスリアン大学(Wesleyan University)で文学学士を、1879年に同大学で文学修士の学位を授与される(McCaffrey, 55)。またギャリソンは、1877年にフィラデルフィアの演説雄弁術学校(the National School of Elocution and Oratory)で演説修士(the Degree of Master of Elocution)を取得する(McCaffrey, 55-56)。さらに彼はその後2年間ニュージャージー州のドリュー神学校(Drew Theological Seminary)で学習し、ペンシルヴェニア州内の教会で聖職者として活動していく(McCaffrey, 56-57)。

だが、フィラデルフィアでの聖職者としての任務を終えたギャリソンは、1887年9月、彼の兄で同じく聖職者であったC. F. ギャリソン(Garrison, Charles F. 1842-?)とともに、ニュージャージー州ミルヴィル⁴⁾の自宅に7名(男5, 女2)の精神薄弱児を集め、私立学校を開校する⁵⁾(A. S. [3rd AR, 1891], 27; Kellogg [10th

AR, 1898], 69: McCaffrey, 57)。

そもそも、ギャリソンの父親S. A. ギャリソン (Garrison, Stephen Ayers 1805-?) は、1846～1851年までニュージャージー州議会議員を務め、州議会において州立精神薄弱施設の必要性和その創設を訴えた人物である (McCaffrey, 37)⁶⁾。だが父親時代には、施設創設は実現せず、当州は1864年から当州の精神薄弱児をペンシルヴェニア州の私立施設であるペンシルヴェニア精神薄弱児施設 (Pennsylvania Training School for Feeble-minded Children) に委託する (McCaffrey, 37)。そのためギャリソンが私立学校を創設するまで、当州内には精神薄弱児・者のための施設は無かったのである。

また、ギャリソン施設長は6人きょうだいであり、そのうち2人は精神薄弱児であったといわれている (McCaffrey, 51-54)。このようにギャリソンにとって、精神薄弱児は、父親時代から彼と家族との関係性において身近であり、それが私立学校開校のきっかけであったと思われる。そして彼は開校に際して、妻に「学校がうまく始動したら、聖職者に戻るだろう」と述べている (McCaffrey, 57-58)。

ところがギャリソンは、私立学校開校後、自ら施設を拡張するために広い土地を探していく (Kellogg [10th AR, 1898] 69: McCaffrey, 57-58)。彼は寄付金活動を始め、その中でB. D. マックスハム (Maxham, Benjamin D.) から、彼のヴァインランドにある大邸宅と40エーカーの敷地の譲渡を受ける。ギャリソンはヴァインランド市の商業委員会 (The Board of Trade of Vineland) に、ヴァインランドに精神薄弱児学校を建設するという約束のもとに、二千ドルの寄付金の調達を依頼する (Doll, 3: Kellogg [10th AR, 1898], 70: McCaffrey, 57-59)。

そして、ギャリソンの寄付金活動によって、1888年3月1日ギャリソン、彼の家族、7名の入所児がニュージャージー州カンバーランド郡ヴァインランドに移り⁷⁾、1888年6月6日にヴァインランド施設は州議会から法人認可を受けるのである (A. S. [3rd AR, 1891], 28: McCaf-

frey, 59-61: Appendix [4th AR, 1892], 58, 他)。

以上のようにギャリソンは、精神薄弱児教育の経験はなかったものの、彼の人生における精神薄弱児との関係、聖職への使命感などを交差させながらヴァインランド施設を創設したのである。

(2) S.O. ギャリソンの創設理念

ヴァインランド施設は、州から法人認可を受けた1888年に、「精神薄弱児・者あるいは白痴児・者のケア、治療、養育、扶養、教育」を施設の目的とし、名称を“The New Jersey Home for the Education and Care of Feeble Minded Children”と定めた (Appendix [4th AR, 1892], 58)。

ギャリソンは、上述の目的の達成のためには家庭的な雰囲気が必要であると考えた。その方法として採用されたのが小舎制である (McCaffrey, 69-70: Doll, 3: 森 [1968], 107)。当時の大規模施設は、一般に中央の巨大な管理棟に近接して増設をする荘厳な重々しい雰囲気であったが、当施設の小舎制は、「外見上施設らしいところはない」と評価され、家庭的であることから支持者からの評判が高かった (McCaffrey, 70: Kellogg [4th AR, 1892], 49)。

ギャリソンの家庭的な雰囲気の小舎制においては、白痴学校期の家族方式の小舎制 (以下、白痴学校期小舎制) と同様に、小舎は寮母を中心とした家族とみなされた。例えば、当施設内にあるブリッジマン小舎では、夫婦のケアの下で20人の男子が生活していた (Kellogg [4th AR, 1892], 51: Baker [7th AR, 1895], 5)。このことは、当施設においても小舎が家族とみなされ家庭的であったことを示す。

しかし白痴学校期小舎制は、一部の私立施設を除き⁸⁾、1860年代の大規模保護収容施設化とともに崩壊する (中村, 274-275; 643-677: トレント [1997a], 60-71)。ヴァインランド施設も保護機能を主とする小舎をも設置している点では (Wister [2nd AR, 1890], 6, 7) 大規模施設と同様の機能を有していたといえる。しかし当施設の小舎は、同時代の大規模施設の小舎の50人～

200人規模（タイオワ・ベル, 80）に比して、きわめて小規模であった⁹⁾。また当施設は、「州から建設費用が支給されなかったため、寄付金を得ることにより、財政的に可能な時に少しずつ小舎を建設しなければならなかった」ことから（McCaffrey, 70: Wister [2nd AR, 1890], 6, 7; [5th AR, 1893], 6）、保護機能が先行する大規模施設ほど急激に進むことはなかった。

このように、ギャリソンは理念においては、家庭的な雰囲気のもとで教育・ケアを提供するという白痴学校期の理念と同様であったが、保護機能を有する点では異なっていた。しかし、同時代の保護機能を有した大規模施設と比べると、小舎は小規模であった。この小規模な小舎制は彼の一貫した方法であった（McCaffrey, 69-70）。

一方で当施設は、次節に示すように、州内の精神薄弱児を受け入れていく。これは当施設が自らを「最広義でいえば州の施設」であると述べるなど（Wistar [2nd AR, 1890], 8）、州における精神薄弱者施設としての役割を認識していたためである。

ギャリソンは、家庭的な雰囲気の小舎で、教育・ケアをするという理念と、州からの精神薄

弱児の受け入れに対する期待との間で葛藤しながら施設運営をしなければならなかったのである。

以下ではギャリソンの教育とケアに対する構想とその変化を具体的に把握するために施設の実態（財政、対象、機能の変化）を検討する。

(3) 財政基盤における準州立施設および私立施設としての性格

当施設の財源は、主に州からの補助費と寄付金に依拠していた¹⁰⁾。

財源に占める州補助費と寄付金の割合（1889-1894年の平均）は、州補助費が約73%に対し寄付金は約10%と、州補助費の占める割合が高い（Table 1）。すなわち当施設は、財政面において準州立施設の性格を有していた。

しかし州は州費生の経費として、教育費、衣服費、維持費を支給していたが、私立施設の建設・改善費用は、州会計から支出することを州憲法は認めていなかった（Garrison [3rd AR, 1891], 17）。そのため、次節に示す対象児の増加に対処するための小舎の建設・改善費用は、寄付金や法人会員費によって支えられていた。したがって寄付金と会員の積極的募集は設立当初から行われた。会員は、一般会員、終身会員、

Table 1 ヴァインランド施設の財源（1888-1899）

単位：ドル

年度	歳入総額	財 源					
		NJ州からの扶養費	NJ州1人当たりの扶養費	NJ州以外の後見人からの扶養費	寄 付 金	農産物及び製作品の売却費	そ の 他
1888-89	—	—	—	—	—	—	—
1889-90	24380.14	17166.63 (70.4%)	228.89	2418.75 (9.9%)	3222.18 (13.2%)	197.10 (0.8%)	1375.48 (5.6%)
1890-91	38608.15	24922.05 (64.6%)	214.85	2765.95 (7.2%)	5537.27 (14.3%)	189.19 (0.5%)	5193.69 (13.5%)
1891-92	48092.97	38936.05 (81.0%)	238.87	3792.17 (7.9%)	3094.66 (6.4%)	744.22 (1.6%)	1525.87 (3.2%)
1892-93	49689.05	39813.67 (80.1%)	235.58	5318.98 (10.7%)	0.00 (0%)	354.23 (0.7%)	4202.17 (8.5%)
1893-94	64165.08	44392.79 (69.2%)	243.92	7296.66 (11.4%)	9596.82 (15.0%)	173.33 (0.3%)	2705.48 (4.2%)
1894-95	69589.56	48289.55 (69.4%)	236.71	6907.68 (9.9%)	10363.18 (14.9%)	104.38 (0.1%)	3924.77 (5.6%)
1895-96	63965.05	51247.68 (80.1%)	218.08	6654.75 (10.4%)	1948.06 (3.0%)	80.69 (0.1%)	4033.87 (6.3%)
1896-97	—	—	—	—	—	—	—
1897-98	55222.15	43371.45 (78.5%)	208.52	7496.56 (13.6%)	2616.87 (4.7%)	17.95 (0.1%未満)	1719.32 (3.1%)
1898-99	59364.37	46249.73 (77.9%)	204.64	9372.30 (15.8%)	1291.55 (2.2%)	23.28 (0.1%未満)	2427.51 (4.1%)

出典 Report of the Treasurer (2nd-8th AR [1890-1896]: 10th-11th AN [1898-1899]);

Superintendent's Report (2nd-4th AR [1890-1892]) をもとに作成。

備考 ①1891-92年度の扶養費の内訳は校長報告でのみ示されているため、校長報告を参照した。

但し、その扶養費総額は会計係報告のそれよりも16ドル少ないため、歳入総額は同額少なく提示した。

②—は不明。

ヴァインランド精神薄弱者施設草創期における総合的施設から教育・訓練専門施設への転換とその意義

終身後援者、名誉会員の4種にわけて募集される。会員数は、一般会員は1891年に117人、1894年に130人、終身会員は1891年に13人、1894年に14人、名誉会員¹¹⁾は1891年に8人、1894年に14人と人数の大きな変動はなかった (Table 2)。これらの会員および寄付金の寄贈者の多くは、当施設がある州南部の都市の居住者であった (List of the Member of the Association [3rd AR, 1891], 32-35: Cash Donations [2nd AR, 1890], 39-43, 他)。つまり当施設は、施設近隣の州南部を中心とした、常に一定数の会員によって支えられており (Appendix [4th AR, 1892], 59, 他)、このことは、当施設が私立施設としての性格をも有していたことを示す。

このような当施設に示される二つの性格 (準州立施設および私立施設) は、当施設の入所者の後見人の構成、すなわち州費生と私費生の割合によっても示される。当施設は法人施設であるにもかかわらず、開設8年目までは私費生の割合が毎年10%未満であり、州費生の割合が高かった¹²⁾ (Table 3)。このことは、当施設が、州立施設の代替的機能を有していたことを示す¹³⁾。

しかし州費生には、全額州費生がいる一方で、一部私費 (一部州費) の者が含まれていた¹⁴⁾ (Movement of the Population [2nd AR, 1890], 14, 他)。中村 (1987) によれば、州費生と2種類の私費生 (実費以上を給付する本来の私費生と一部私費生) からなるシステムは当時の盲・

Table 2 法人会員総数およびその種別内訳の変遷 (1888-1899)

年報発行年	1889	1890	1891	1892	1893	1894	1895	1896	1897	1898	1899	
年報号数	1st	2nd	3rd	4th	5th	6th	7th	8th	9th	10th	11th	
会員種別	一般会員	—	—	117	128	130	129	126	126	—	124	112
	終身会員	—	—	13	13	13	14	14	17	—	14	14
	終身後援者	—	—	0	0	0	0	0	0	—	0	0
	名誉会員	—	—	8	7	12	14	15	15	—	18	18
合計	—	—	138	148	155	157	155	158	—	156	144	
一般会員会費からの収入(ドル)	—	—	585	640	650	645	630	630	—	620	560	

出典 List of the Members of the Association (3rd-8th AR [1891-1896]: 10th-11th AR [1898-1899])

備考 —は不明.

Table 3 扶養費出所別の入所児数ならびに他州出身者数 (1888-1899)

年度	私費生			州費生			総計			他州出身者数
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	
1888-89	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1889-90	2	3	5 (6.3%)	56	19	75 (93.8%)	58	22	80	2
1890-91	6	1	7 (5.2%)	92	35	127 (94.8%)	98	36	134	20
1891-92	7	3	10 (6.7%)	101	39	140 (93.3%)	108	42	150	10
1892-93	11	5	16 (9.5%)	111	42	153 (90.5%)	122	47	169	14
1893-94	13	5	18 (9.4%)	125	48	173 (90.6%)	138	53	191	13
1894-95	13	4	17 (7.8%)	141	59	200 (92.2%)	154	63	217	—
1895-96	16	3	19 (8.2%)	151	63	214 (91.8%)	167	66	233	—
1896-97	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1897-98	19	5	24 (11.2%)	132	58	190 (88.8%)	151	63	214	16
1898-99	23	11	34 (14.4%)	133	69	202 (85.6%)	156	80	236	20

出典 Movement of the Population (2nd-8th AR [1890-1896]: 10th-11th AR [1898-1899])

備考 ①州費生には全額州費及び一部州費の者を含む.

②—は不明.

ろうあ院やマサチューセッツ州やニューヨーク州の精神薄弱者施設でもみられたことであり、それは富裕層への教育機会の提供を趣旨としたものであった(中村, 247-248)。

このように、財源および後見人構成にみる当施設の準州立施設および私立施設としての性格は、州立施設の代替機能を果たすことと、富裕層家族の精神薄弱児の教育・保護需要に応じることの二点に集約することができる。

2. 対象児の多様化と増加

次に、施設の創設理念と準州立施設としての性格が、入所児の障害の状態・程度や数的推移にどのように反映されていたのかをみしてみる。

まず、入所児の障害の状態・程度であるが、当施設には、改善が期待される子ども、改善の見込みがないとされた子ども、てんかんなどの多様なニーズを持った子どもが入所していた。改善が期待される者とは、読み書き、算数、複雑な手技の教授訓練が指導され、他者のために働くことが可能とされた(Craven [4th AR, 1892], 13) 程度の者であった。彼らは痴愚級以上の精神薄弱だったと思われる。

一方、改善の見込みがないとされた子どもはおおよそ白痴であったと考えられる。彼らの中には、麻痺を伴う寝たきりの子ども、慢性疾患

を持つ子どもがいた(Craven [4th AR, 1892], 13)。白痴の増加は創設当初の1890年には指摘されており、1894年には比較的重い障害(low grade)をもつ入所児は全体の25%となり、そのうち9割以上にてんかんが見られるようになる(Conwell [6th AR, 1894], 18-24)。白痴およびてんかん児は、設立当初から常に医師のケアが必要とされ、「保護ケース(the custodial cases)」と呼ばれた(Wister [2nd AR, 1890], 7)。

また入所児数の男女比は、女子が男子に比べて少ない。女子は入所児総数のほぼ25~30%である。当施設の向かい側に、1888年に設立された州立成人女子精神薄弱者施設(New Jersey State Institution for Feeble-Minded Women)があった¹⁵⁾(Garrison [2nd AR, 1890], 21; Leiby [1967] 103; McCaffrey, 87) ことが、当施設に女子入所児数が少ない原因の一つであると考えられる。

次に入所児数の推移であるが、当施設の入所児数は毎年増加している(Table 4)。1890年には74人であったが、1894年には191人と2.5倍以上の増加を示している。入所児数増加の理由は、第一に新規入所児数の平均が45人程度であるにもかかわらず、退所児が5~11人と少数であったことである。つまり、施設に入所し続ける者

Table 4 ヴァインランド施設の入退所状況 (1888-1899)

年度	前年度からの入所児			新規入所児			退 所 児			死 亡 児			入所児総計		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
1888-89	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1889-90	37	11	48	21	11	32	2	3	5	1	0	1	55	19	74
1890-91	55	19	74	43	17	60	8	3	11	2	2	4	88	31	119
1891-92	88	31	119	39	15	54	7	3	10	12	1	13	108	42	150
1892-93	108	42	150	26	9	35	8	0	8	4	4	8	122	47	169
1893-94	122	47	169	31	11	42	9	2	11	7	2	9	137	54	191
1894-95	137	54	191	34	17	50	13	5	18	4	3	7	154	63	217
1895-96	154	63	217	22	12	34	6	5	11	3	4	7	167	66	233
1896-97	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1897-98	139	61	200	22	12	34	9	9	18	1	1	2	151	63	214
1898-99	151	63	214	31	20	51	20	3	23	6	0	6	156	80	236

出典 Movement of the Population (2nd-8th AR [1890-1896]: 10th-11th AR [1898-1899])

備考 ①数値は年度末である5月末又は6月現在。

②本表の1890-91年度と1891-92年度の入所者総計が、Table 3の入所者総計と一致しないのは、後者には同年度の退所者と死亡者の数が含まれていないためである。

③—は不明。

がいたということである。また死亡者数は、インフルエンザが流行した1892年の13人を除いて、1890年から1894年までで平均5人程度であった。この数は、相対的にみて少ないといえる。第二に、先に述べたように当施設は州立施設の代替機能を有していたのであり、州域全体の精神薄弱児の教育・ケアの需要に応じる必要があったことである。

そして第三に、入所児数の増加は、多様なニーズに基づく小舎制による編成を可能にする条件であると考えられていたことであった (Baker [7th AR, 1895], 8)。既述のとおり小舎制は、家庭的な雰囲気のもとで生活および教育・ケアを提供するために採用されたものであるが、それと同時に、多様な対象児をそのニーズに応じて分類して処遇する役割をも担った。例えば男女別の処遇や、てんかん児と保護対象の白痴児の小舎への分離を可能にした (A. S [2nd AR, 1890], 2; Wister [2nd AR, 1890], 6, 7; Garrison [3rd AR, 1891], 24, 26; [5th AR, 1893], 38)。

以上のようにヴァインランド施設は、痴愚級以上の精神薄弱、白痴、てんかん児などの多様な対象児で構成されていた。また、入所児数の増加に伴い保護対象者が増加する傾向にあり、入所児数の増加にもかかわらず退所児数が少ないことは、成人になっても施設で生活を続ける者がいたことを示唆する。

3. 医療との連携および作業部門の強化と総合施設化

(1) フィラデルフィア病院との連携および医療スタッフの充実

ヴァインランド施設では、医師は「施設長の指示のもと、入所者の精神状態の病歴と病因について、また医療的措置について記録を残しておくこと」が求められていた (McCaffrey, 174)。また、ギャリソンは医師ではなかったが、医学の知識は、この分野において必要であると評価し、医学の知識を重視していた (Garrison [5th AR, 1893], 40)。

このことは、当施設の医療スタッフの構成からも伺える。施設の医療メンバーは、施設を頻

繁に出入りする地域医師および、定期的な訪問を行なう顧問医師により支えられていた。1893年からは地域医師に代わり常駐医師が導入された。顧問医師は、主にフィラデルフィア病院の外科医、神経疾患専門医、眼科医、胸部疾患専門医、咽頭医、耳鼻科医で構成される (Officers of the School [2nd AR, 1890], 4; [3rd AR, 1891], 4, 他)。また設立6年目には、顧問医師に歯科医、小児病理専門医、病理学専門医、婦人科医が加えられる。多い年で16人の医師がスタッフとして関わっていた (Officers of the School [7th AR, 1895], 4; [10th AR, 1898], 4; [11th AR, 1899], 4)。また、特別な処置が必要な入所児は、校長と常駐医師の承諾のもと顧問医師によりフィラデルフィア病院に送られ、更なる検査と治療がおこなわれている (Staff of Consulting Physicians [3rd AR, 1891], 14)。このように、当施設では充実した医療スタッフとフィラデルフィア病院との連携を通じ、比較的質の高い医療体制が整えられていた。

当施設における医療の目的およびその内容は、以下の三点に集約される。第一に、多くの入所児を抱えていた当施設において欠かせなかった、施設の衛生管理をはじめ給食の献立を含む入所児の健康全般の管理である。設立当初からの入所児数は、毎年増加し続けていたにもかかわらず、死亡者数は、比較的一定であり、その背景には、地域医師や常駐医師による行き届いた衛生管理と入所児の健康管理が伺える。

第二に入所児に対する医療ケアである。例えば、1893年の医師報告書において、眼の異常は学習面における困難をもたらすと指摘されている。この眼の異常は、頭蓋内または、一般的な神経疾患と密接に関連している可能性が高いことが指摘され、内斜視の手術や眼鏡の処方が行われていた (Wiley [4th AR, 1892], 17-22)。また、麻痺による行動の制限は、施設の神経訓練ならびに発達訓練を阻害しているという見解のもと、麻痺を伴う入所児に対して手術も行われている (Wiley [3rd AR, 1893], 11-13; Corson [7th AR, 1898], 23-24; Corson [8th AR, 1899],

18-20)。このことから、比較的障害が軽い子どもたちに対する、教育・訓練の向上を目的とした医療ケアが施されていたことがわかる。また一方で、比較的障害が重い子どもたち、とりわけてんかん児に対しては、将来的な自立を見込めないことを理解しつつも、発作を抑制するためのプロマイド治療など、少なくとも彼らの苦痛を和らげる、もしくは健康管理および改善を目的とした医療ケアが施されていた (Wiley [4th AR, 1892], 17-22)¹⁶⁾。

第三に入所児を対象とした研究である。当施設では、1892年頃から入所児の数の増加に伴い、入所児の中に混在していたてんかん児や白痴児などの(事例)研究が紹介されている (A. S. [4th AR, 1892], 23-31)。また当施設には1894年に小児病理学専門家、1895年に病理学専門医が加わり (Officers of the School [6th AR, 1894], 4; [7th AR, 1895], 4)、入所児の性質を理解するための研究が重ねられた。このように入所児の研究が活発になされた背景には、医師の医学的関心とともに精神薄弱者施設における入所児の分類の必要性があった¹⁷⁾。

以上のように、当施設では、医療スタッフの充実と、フィラデルフィア病院との連携のもと、対象児のニーズに応じた医療的ケアがなされていたのであった。

(2) 学校教育的な指導内容の重視と作業機能の強化

ヴァインランド施設では、創設期から学校教育の基礎的科目の指導、生理学的方法に基づく指導の教授を重視する。基礎的科目には、スペル・読み・書き・算数・地理・歴史・時計の学習、生理学、実物教育等があり、生理学的方法に基づく指導と考えられるものには積み木・ビーズ・紐通しなどがあった (Table 5)。こうした教育・訓練は、1890年から1895年頃まで変わらず維持されている (Daily Order of School Exercise [2nd AR, 1890], 24-26; [3rd AR, 1891], 30-31; [4th AR, 1892] 56-57; [5th AR, 1893], 56-57; [6th AR, 1894], 56-57)。対象児は創設当初から幼稚園段階と基礎的科目を中心に行うEnglish

と呼ばれる初等教育段階に編成されていた (Garrison [2nd AR, 1890], 16; Johnstone [10th AR, 1898], 27-31)。初等教育段階の教育内容が実施された背景には、精神薄弱児とは異なり、遅れの原因が生来の精神薄弱ではなく単に学校の学習に遅れている学業不振児 (backward) が当施設にいたことが考えられる¹⁸⁾ (A. S. [5th AR 1893], 表紙)。

また、1890年には寮母兼校長のブレイク¹⁹⁾ (Blake, Ada E.) によってブラスバンドが始められている (Officers of the home [2nd AR, 1890], 4; Garrison [2nd AR, 1890], 16)。当施設におけるブラスバンドの実施が他施設から影響を受けて始められたとの明確な記述はないが、ブラスバンドは、他の大規模施設においても実施されている²⁰⁾ (中村, 364-365)。ヴァインランド施設においても音楽の教育的意義が十分認識されていたが (Kellogg [4th AR, 1892], 52)、能力の高い者によるブラスバンド等の余興は、クリスマス祭典で披露されるなど (Garrison [8th AR, 1896], 22; Baker [8th AR, 1896], 8) 教育効果を示す媒体として用いられる側面もあった。

教育後の処遇方針については、1893-1894年頃からギャリソンによって学校部門を出た者に対する作業の場の必要性が表明される (Garrison [6th AR, 1894], 49-50, 52)。この成人の作業機能を導入するきっかけは、同時代の他の大規模施設における成人の作業機能の構築志向であった。1893年の全米慈善矯正会議20周年年会でマサチューセッツ精神薄弱者施設長 W. E. フェーナルド (Fernald, Walter E. 1859-1924) は、教育後は彼らを施設内で働かせるべきだと主張する (Fernald [1893], 210)。

またフェーナルドは、上記の主張を論文に記し、その論文の前半部分で精神薄弱者施設の歴史を概観したのであるが、ヴァインランド施設1893年次報告では、軽度級の者を教育後に施設内で働かせることを記した後半部分のみが転載された (Fernald [5th AR, 1893], 44-49)。このことは、ギャリソンが学校部門で訓練した者を施

設内で働かせることを支持していたことを示唆する。実際ギャリソンは、1894年、学齢期後の軽度の子どもを働かせるために作業所を拡充する必要性を主張する (Garrison [6th AR, 1894], 49-50, 52)。

ギャリソンが成人の作業機能の構築を試みた時期は、学校部門で作業学習が強化された時期と符合する。1893年に学校部門では家具修繕・家具塗装・大工仕事・紳士服仕立て・婦人服仕立て・ミシン縫製・編み機による編み物・マット作り・マットレス作り等の多くの作業種が追加される (Table 5)。教育・訓練プログラムにおける作業学習の強化は、教師の雇用計画にも反映され、1893年には手工訓練を専門的に行う教師が雇用された²¹⁾。

作業学習は、子どもの内省機能と注意を傾ける習慣を確立するために適していると考えられただけではなく²²⁾ (Kellogg [4th AR, 1892], 53-54)、作業の成果が施設の経費削減につながることも主張された²³⁾ (Baker [6th AR, 1894], 7; [7th AR, 1895], 5)。作業成果を経費削減の説明とする背景には、州と慈善団体の負担を可能な限り軽減しなければならないというギャリソンの切迫した意識があった (Garrison [6th AR, 1894], 50)。同様の意識は、精神薄弱者施設の社会的意義を主張する必要がある他の第二世代の施設長にも共通するものであった²⁴⁾。

以上のようにギャリソンは、州の精神薄弱児を受け入れ、包括的な対象のニーズに応じる過程で、教育・訓練機能を構築し、1893年には、成人の作業機能を志向するようになった。1893-1894年頃までに当施設は、保護機能、医療・研究機能、教育・訓練機能、成人の作業機能からなる総合的な機能を有する施設になったといえる。

Ⅲ. 総合施設から教育・訓練専門施設への転換 (1890年代半ばー1899)

1. 入所対象外としてのてんかん・白痴と施設機能の分化

(1) 州立てんかん村の構想と実現

あらゆる対象児を受け入れていた当施設では、医師の監視が常に必要なたんかん児や (Mills [5th AR, 1893], 19)、絶えず注意と指導が必要な白痴など (Craven & Hunt [7th AR, 1895], 16)、教育対象ではなく保護収容の対象とならざるを得ない入所児の増加が顕著になりつつあった。彼らは1894年には入所児の25%を占めるようになっていた (Conwell [6th AR, 1894], 18-24)。この実態は、当施設で教育・訓練を受けるべき精神薄弱児の受け入れを困難にしていた (Baker [7th AR, 1895], 10)。そのためギャリソンは、保護機能が拡大し教育・訓練機能が疎かになることを危惧し (Garrison [6th AR, 1894], 49)、当施設は、1890年代半ばからてんかん児の排除を試み、教育・訓練専門施設への転換を目指していくのであった。

ギャリソンは、これまでに蓄積された当施設の経験や、すでにてんかん児の処遇方法が検討されてきたオハイオ州やニューヨーク州のてんかん施設の実態を踏まえ、てんかん児に対する見解を以下のように示している。第一にてんかんは病気であり、てんかん専門医の処遇範囲であり、教育者の処遇範囲ではないことである (Garrison [9th AR, 1899], 38; [11th AR, 1899], 17)。第二にてんかんには特有のニーズがあり、治療の可能性を探るためには研究がなされるべきということである (Baker [7th AR, 1895], 10)。

ギャリソンは、教育に重点を置く当施設がてんかん児のケアには不適切であると認識する一方で、当時多くのてんかん児が措置されていた精神病者のためのアサイラムも不適切であると認識していたため (Garrison [7th AR, 1895], 30; [8th AR, 1896], 23)、1895年にニュージャージー州議会にてんかん村の設置に関する法案を提出する (Garrison, [7th AR, 1895], 24)。その際ギャリソンは、州内の何百人ものてんかん児・者を集めることにより、保護、扶養、および教育にかかる州費の削減が可能であると主張する (Garrison [7th AR, 1895], 30, 32; Baker [8th AR, 1896], 6)。

その後法案は、1896年に州議会の両院で可決

されたが、知事が署名を拒否したことから実現しなかった。しかし1899年には可決され、ギャリソンを理事として迎えた州立てんかん村が完成する (Baker [11th AR, 1899], 7)。

(2) 痴愚級以上の精神薄弱児教育・訓練専門施設への転換

ギャリソンは、てんかん児をヴァインランド施設の対象外とした後、1897年頃から教育的な成果がみられず、生産的になりえない白痴も同じく対象外とすることを主張する (Garrison [9th AR, 1899], 37-38)。そして、当施設の対象児は、教育・訓練の成果がみられる痴愚級以上の精神薄弱児に絞られていく。

ギャリソンの白痴を対象外とする考えは、教育・訓練機能が衰退することへの危惧を反映したものであった。それは彼の、保護対象の白痴が増加すると精神薄弱者施設は単なる保護施設化し、指導が衣類・医療的ケア・娯楽の提供のレベルに低下してしまい、それは学校ではなく『白痴の救貧院』と同様である (Garrison [9th AR, 1899], 37-38; [11th AR, 1899], 17, 19-20) という主張からも示唆される。

ギャリソンは、他の第二世代の施設長らと同様に²⁶⁾教育・訓練の目的を施設内自立に設定し、指導における作業の学習を強化する (Garrison [9th AR, 1899], 37-38; 40 [11th AR, 1899], 17)。そして1898年、当施設の理事会および婦人訪問委員会の合同委員会は、成人に対する就労の場の必要性に対処すべく、州からの委任(warrant)が満期になる10名に施設内の仕事を与え、その働きに対し賃金を与える、ヴァインランド・プランの開始を議決した (Baker [10th AR, 1898], 10; Garrison [11th AR, 1899], 41)。同プランは、彼らが施設外で直面しうる「あらゆる複雑な困難への合理的かつ誠実な解決策」であり、「男性あるいは女性らしい自尊心を喚起させる最善策」 (Baker [10th AR, 1898], 10; Garrison [11th AR, 1899], 41) であった。

しかしギャリソンは、単に作業機能を強化しただけではなく、インディア州立精神薄弱者施設からジョンストンを招聘し、当施設の教育・

訓練機能の強化に努める。1899年には年次報告において、当施設の学校部門における指導の進歩が示された²⁶⁾ (Johnstone [11th AR, 1899], 27-29)。

当時の先行する大規模施設の学校部門の位置づけは、施設内労働力を育成するという意味では中核的だが、保護機能および成人の作業機能の拡大の中にあっては、学校の役割は部分的であった。しかしギャリソンは、教育・訓練を行う専門施設としての性格を最後まで強調し、その維持に努めたのである。

2. 州補助費および入所者数の変動とヴァインランド施設の教育・訓練機能への需要

このようなヴァインランド施設の対象設定の転換が、前述のように、州財政との緊張関係のなかで選択されたことは、次のように、州補助費および入所者数の変動に明らかに示されている。

当施設の州補助費は、1895-96年度の51,248ドルをピークとして、1897-98年度の43,371ドルにまで縮小されるが (Table 1)、この経費は入所者の大半を占める州費生の扶養費であったから、州補助費の縮小と連動して入所者総数も減少した (Table 3, 4)。この入所者総数の縮小期における入退所状況をみれば、新規入所許可者の数が1895-96年度および1897-98年度は34人に留まる一方、退所者数は、1895-96年度の11人から1897-98年度に18人へと増加している (Table 4)。

つまり、この時期には新規入所許可者の制限、ならびに退所措置が積極的に実施されたと推察できる。すなわち、一方では、上述のギャリソンの主張に添い、てんかん者、続いて白痴を対象外とすることで、痴愚級以上の精神薄弱児を主対象とする方針が推進された。とくに、てんかん者の実質上の入所制限や退所措置は、前述の州立てんかん村が設立される1899年よりも前から開始されていたことが、以上の入退所状況から推察される。

他方、退所者の中には、前述のヴァインランド・プランにより施設内自立を果たすことを期

待された精神薄弱児も含まれた。施設の指導監督の下で彼等が自活することは、退所後の公的救済費の節減により、州および納税者の負担を軽減しようとするものであった (Garrison [6th AR, 1894], 50)。

実際、当施設は、州扶養費の効果的利用を期待されていたと考えられる。まず、州費生1人当たりの扶養費は、州法により、年間200ドル以下と規定されていたにもかかわらず (McCaffrey, 66)、その額は創設当初から200ドルを超過していた。また、州費生1人当たりの扶養費は、1894-95年度の約244ドルをピークとして漸減していき、1898-99年度には約205ドルまで抑制された (Table 4)。

要すれば、教育・訓練の主対象を痴愚級以上の精神薄弱児に設定していくこと、そして教育・訓練後の施設内自立に向けた退所措置には、州扶養費の効果的利用ないし節減という州政府からの期待に応じるという側面があった。

しかし教育・訓練専門施設への転換のより重要な要因は、前述のとおり、痴愚級以上の精神薄弱児への教育・訓練そのものの社会的意義を認めていたことに求められるであろう。すなわち当施設では、財政規模および入所者総数の縮小化がなされる一方で、私費生の数が1898-99年度には236名中34名 (14.4%) となり、他方で他州出身数は開設後一時20名となり、その後減少したが、1897-98年度には16名、1898-99年度には20名となり、再び増加傾向がみられた (Table 3)。法人立である当施設が受け入れた他州出身者は私費生であったと思われる。これにより、ニュージャージー州以外の後見人 (州内外の私費生の家族) による扶養費もまた増加していった (Table 1)。これらの変化は、当施設の痴愚級以上の精神薄弱者の教育・訓練専門施設としての意義が、子弟の教育に比較的関心のある州内外の富裕層の家族から認められつつあったことを示唆するものである²⁷⁾。

IV. むすび—新興施設としてのヴァインランド施設の可能性

ヴァインランド施設には、創設当初からてんかん、痴愚、白痴等の精神薄弱児が入所していた。そのため、施設は包括的な対象をケアする総合施設として、入所児それぞれのニーズに応じた教育・訓練、医療の内容・方法を模索していく。その中でも、教育・訓練には重点がおかれ、学校教育の基礎的科目の指導と生理学的方法による指導が設立初期から取り組まれていたのである。

しかしヴァインランド施設も、他施設の多くと同じように、入所者数の増加とそれに伴う過密化の問題に直面する。また、設立当初から実践されてきた教育・訓練、医療の経験とその蓄積によって、専門医師の対象であるてんかん、教育の見込みがなくケアの対象である白痴という認識を深めるようになる。とりわけギャリソンは、施設の教育・訓練機能の衰退を危惧し施設機能の分化を構想するようになる。

一方で設立当初から、施設財政費は、その多くが州補助費で占められていた。これはギャリソン自身が認識していたように、施設が、州と納税者にとって有用的かつ経済的でなければならぬことを意味した。そのため施設は、私費生を受け入れる法人施設ではあったものの、つねに州にとっての有用性を追求しなければならぬ状況に置かれていたのである。このようにヴァインランド施設は、総合施設機能を継続することによる施設機能への懸念、そして設立当初からの州との緊張関係から、教育・訓練専門施設へと転換していくのである。

ところで、ヴァインランド施設は、第二代施設長ジョンストン時代になると、子どもの診断、編成にビネ知能検査などの心理学を導入し、心理学、教育学等による科学的な手法で精神薄弱研究を進めていく。そもそも、当施設は法人施設であり、設立当初から他施設に比べて小規模な小舎制を採用するなど、自主性と柔軟性に富んだ施設運営がなされていた。このことは1898年に、ジョンストンを迎え入れたことにも見ら

ヴァインランド精神薄弱者施設草創期における総合的施設から教育・訓練専門施設への転換とその意義

れる。すなわちギャリソンは、19世紀末の施設長の多くが医師であった時代に、あえて医師ではないジョンストンを招聘し、彼の精神薄弱児教育・訓練方法による専門性によって教育・訓練専門施設への転換を試行しようとしていたのである。

付 記

ヴァインランド施設の年次報告を提供していただいた筑波大学人間総合科学研究科の米田宏樹先生に感謝申し上げる。

本論文の分担については、本間貴子がⅡ-1-(2)、Ⅱ-3-(2)、Ⅲ-1-(2)を、高野聡子がⅠ、Ⅱ-1-(1)、Ⅳを、宮内久絵がⅡ-3-(1)、Ⅲ-1-(1)を、長塚修一がⅡ-1-(3)、Ⅱ-2を、佐々木順二がⅢ-2を主に担当した。

- 1) 久保は、ヴァインランド施設に1916年6月27日に訪問し、川田の案内で見学をしている (Diary Notes [29th AR, 1917], 40: 久保, 856-864).
- 2) 川田は、ヴァインランド施設に1916年4月～1917年2月まで滞在し (Diary Notes [28th AR, 1916], 38; [29th AR, 1917], 45), 夏期学校に参加し、研究部門でビネ知能検査等について学んだ。
- 3) 収集できなかった1年次については、McCaffrey (1965) で述べられている1年次の内容と、2年次年報以降で回顧されている1年次の記述を参考にする。
- 4) ミルヴィル (Millville) は、ニュージャージー州カンバーランド郡にあり、ヴァインランドの隣である。
- 5) McCaffreyによれば、正式な開校日は10月25日である (McCaffrey, 57)。またこの私立学校を3年次年報では“private “Home””, Kelloggは“private training school”, McCaffreyは“private school”と明記しており (A. S. [3rd AR, 1891], 27: Kellogg [10th AR, 1898], 69: McCaffrey, 57), 教育行政から認可を受けていたのかについては不明であるものの、ギャリソンの自宅において精神薄弱児教育への取り組みが始められていた。
- 6) S. A. ギャリソンは、1846～1848年まで州議会下院議員、1848～1851年まで州上院議員を務める (McCaffrey, 37).
- 7) ヴァインランドへ移転後すぐに、ギャリソンの兄C. F. ギャリソンは、私費生のための訓練施設を開設している (Kellogg [10th AR, 1898], 73: McCaffrey, 51-52)。その訓練施設は、ニュージャージー州のクランバリーにあり、13名の生徒をケアしていた (Kellogg [10th AR, 1898], 73).
- 8) マサチューセッツ州にある私立ベアリイ校 (1848年創設) は、ブラウン施設長 (1851-1892年在任) の経営理念のもと、対象児を富裕層の家族に限定し、教育・訓練機能を重視する小規模な教育的ホームを維持する。私立ベアリイ施設は保護機能を保持するが、ブラウンは、教育・訓練機能を最後まで強調し続けた (中村, 643-670).
- 9) この小舎では寮母長 (matron) やケア・テーカーが入所者に対し博愛的に接することが規則として定められており、このように接することは入所者の望ましい行動の育成、行動のコントロール、衛生への配慮、身体の成長のために不可欠であった (Appendix [2nd AR, 1890], 33-47)。大規模施設も、入所者に対して虐待したり搾取することなく秩序をもって運営していることを示していた (トレント, 179).
- 10) なお、施設内で生産した農作物および製作品の売り上げは1891-1892年の1.5%を除いて、1889-1893年の平均は約0.6%程度に過ぎなかった (Table 1).
- 11) 名誉会員には州知事などが選任されている。
- 12) 州費生の多くは州北部の出身者であったために、ギャリソンは州北部の居住者に対して、深い関心を持ち活発に関わるよう忠告した (McCaffrey, 65-66)。最も多い割合を占めた州北部の都市エセックスの出身者は、1889-90年の19人から1895-1896年には60人に増加した (A. S. [2nd AR, 1890], 15; [8th AR, 1896], 25).
- 13) ニュージャージー州は州立施設を創設しない代わりに、他州に委託し、州費として、1人あたり200ドル未満の扶養費を支出するという規定があったが (McCaffrey, 66)、ヴァインランド施設は、開設後間もない1890年からの州費生を受け入れ、1891年には、ペンシルヴェニア州エルウィンの精神薄弱者施設にニュージャージー州から委託していた14名を受け入れる (Wistar [3rd AR, 1891], 7).
- 14) ギャリソンは、州議員の父をもち、農場を経営する家庭で育ち自分自身が富裕層であった。つまり、彼や彼の兄が個人的に精神薄弱教育・訓練に携わったことは、富裕層家族の精神薄弱者への教

- 育や保護に対する需要を例示するものであり、他の富裕層家族の需要にも応えるものであった。すなわち、ギャリソンの2人のきょうだいの存在が家族にもたらす問題 (trouble) は、同じ処遇にある「他者の問題」でもあり、彼はその問題に対処することを望んだ (McCaffrey, 54, 55).
- 15) ギャリソンは約1年間 (1888年12月24日～1889年11月15日)、この州立女子精神薄弱者施設の施設長も兼任している (McCaffrey, 88).
- 16) 私立ベアリイ施設では、1888年にプロマイド治療がてんかん発作に効果的であることを述べていることから、当施設だけでなく、他の施設においても同様の治療法がおこなわれていたことが考えられる (中村, 662).
- 17) ヴァインランド施設では、1893年にはイギリスの精神科医 G.E. シャトルワース (Shuttleworth, George Edward 1842-1893) の分類法を含め、いくつかの分類法が試されている (Wiley [5th AR, 1893], 19).
- 18) 1875年のニュージャージー州義務就学法の実施以降、州では、公立学校に学業不振児が生じていた。当施設においても、公立学校からの学業不振児が入所してきたことが推察される。
- 19) ブレイクは1892年から寮母職から退き、音楽部門と学校長の職に専念する (Garrison [4th AR, 1892], 43)。理由は不明であるがブレイクは1894年にはヴァインランド施設を辞めている (Officers, Teachers, etc. [6th AR, 1894], 5).
- 20) 例えばペンシルヴェニア施設のパリッシュ施設長は、音楽のもつ精神薄弱児に対する教育的効果を認めていた (中村, 364-365).
- 21) 1893年の教師数の合計は11人であり、その内訳は手工訓練担当 (5人) と手工以外を担当する教師 (6人) である。1893年の手工訓練担当教師は始めて男性の教師2名が加えられた (Officers of the Home [3rd AR, 1891], 4: Officers, Teachers, etc. [5th AR, 1893], 4).
- 22) Kelloggは、ヴァインランド施設の教育がフレーベルなどの幼稚園教育の影響を受けていると示唆している (Kellogg [4th AR, 1892], 49-55).
- 23) 作業のほとんどが新製品を作るよりも修繕であるように (Fish [6th AR, 1894], 55)、作業は施設外部に売って利益を得ることが目的ではなく、自給自足が目的だったと考えられる。
- 24) タイオワとベルは、ペンシルヴェニア施設における家事や農業、手工の職業訓練に対する施設長の見解を第二施設長パリッシュ (1863年) とカーリン (1892年) を比較し、パリッシュ時代は作業が入所者に有益であることが第一の目的であるのに対しカーリン時代は作業の利益が施設経費の節約に役立っていることを強調した点を指摘した (タイオワ・ベル, 76).
- 25) 一般的に精神薄弱者施設の第二世代の施設長は、白痴学校時代の校長の教育について部分的に批判的であったとされる (タイオワ・ベル, 75; 中村, 528-529)。白痴学校が教育の単一機能であったことへの批判、生理学的教育法の繰り返しの方法への批判、教育・訓練をすれば地域生活が可能になるという過大な見積もりに対する批判等である。
- 26) 初等教育段階は、身体訓練・発音・読み・朗読を含めた表現活動に特に注意が向けられる学級、感覚訓練と注意や記憶などといった観察することの訓練を強化する学級、数・文字・言葉と文章構成等を学ぶ学級と、注意深く子どもたちを編成し教育がなされたことが進歩として報告されている。また、幼稚園段階においても教育成果が出ていることが主張される。音楽では、バンドにクラリネットが追加され、オーケストラでは難易度の高い音楽が上手に演奏されることが報告された (Johnstone [11th AR, 1899], 27-29).
- 27) 1898-99年度には他州出身者が4名増加したが、そのなかには、ニューヨーク州からの2名 (計10名)、新たにマサチューセッツ州からの1名が含まれた (A. S. [10th AR, 1898], 36; [11th AR, 1899], 49)。州内に精神薄弱者施設をすでに有したこれらの州からの入所者の増加ないし新規入所は、富裕層家族の当施設への期待の反映であったと考えられる。

引用文献

- Doll, E. E. (1988) Before the big time: early history of the Training School at Vineland, 1888 to 1949. *American Journal on Mental Retardation*, 93(1), 1-15.
- Fernald, W. E. (1893) The history of the treatment of the feeble-minded. *Twentieth National Conference of Charities*, 203-221.
- 久保良英 (1916) ヴァインランド低能児学校参観記. *心理研究*, 10(60), 856-864.
- Leiby, J. (1967) *Charity and correction in New Jersey*, A

ヴァインランド精神薄弱者施設草創期における総合的施設から教育・訓練専門施設への転換とその意義

- history of state welfare institution. Rutgers University Press, New Jersey.
- McCafferey, K. R. (1965) Founders of the Training School at Vineland, New Jersey: S. Olin Garrison, Alexander Johnson, Edward R. Johnstone. University, Ed. D., UMI, Michigan.
- 森清 (1968) 精神薄弱教育の問題 (VI) - Vineland Training SchoolとSocial Maturity Scaleの歴史意味 - . 熊本大学教育学部紀要, 16, 107-110.
- 中村満紀男 (1987) アメリカ合衆国障害児学校史の研究. 風間書房.
- The New Jersey Home for the Education and Care of Feeble-minded Children for the Year of 1890-1892, 2nd-4th Annual Report of.
- The New Jersey Training School for Feeble-minded Children for the Year of 1893-1896, 5th-8th Annual Report of.
- The New Jersey Training School for Feeble-minded Children for the Year of 1898-1899, 10th-11th Annual Report of.
- Proceedings of the National Conference Charities and Correction (NCCC). Proceedings. 24th (1898), 416-418.
- The Training School at Vineland New Jersey for the Year of 1916-1917, 28th -29th Annual Report of.
- トレント, J. W. Jr., 清水貞夫・茂木俊彦・中村満紀男監訳. (1997a) 「精神薄弱」の誕生と変貌 (上) - アメリカにおける精神遅滞の歴史 - . 学苑社.
- Trent, J. W. Jr. (1995) Investing the feeble-minded : A history of mental retardation in the United States. University of California Press. California.
- トレント, J. W. Jr., 清水貞夫・茂木俊彦・中村満紀男監訳. (1997b) 「精神薄弱」の誕生と変貌 (下) - アメリカにおける精神遅滞の歴史 - . 学苑社.
- Trent, J. W. Jr. (1995) Investing the feeble-minded : A history of mental retardation in the United States. University of California Press. California.
- タイオワ, P・ベル, L., 清水貞夫・津曲裕次・中村満紀男監訳. (1988) 精神薄弱者とコミュニティ - その歴史 - . 相沢書房.
- Tyor, P. and Bell, L. (1984) Caring for the retarded in America: A history. Greenwood Press. Westport, Conn.
- 米田宏樹・本間貴子・岡典子・山田慶子 (2005) ヴァインランド・トレーニング・スクールにおける「精神薄弱」特殊学級担当教員養成研修プログラム - 初期の状態 - . 心身障害学研究, 29, 149-162.

— 2006.9.15 受稿、2007.1.25 受理 —

**The Transition of the New Jersey Home for Feeble-Minded Children
from a Multi-Functional Institution to an Education- and Training-Oriented Institution
– During the Period of the Founding Superintendent, S.O. Garrison (1888-1899) –**

**Takako HONMA, Satoko TAKANO, Hisae MIYAUCHI,
Shuichi NAGATSUKA and Junji SASAKI**

The New Jersey Home for the Education and Care for Feeble-Minded Children, an institution which was established by Stephen Olin Garrison was the first institution in the State of New Jersey. The institution was established on a basis of funds that were collected during his fund raising activity. The institution cared for children with various needs in a comprehensive manner, emphasizing on education and training. However, as the increased number of children in the institution became problematic and as the system of the institution was reviewed on the built experiences of education, training and medical care, the weakening of educational and training function became an increasing concern. Moreover, the concern towards the weakening of the function and the tension between the state and the institution, which had existed since the beginning, induced the institution to envisage separation of different functions, shifting towards education and training oriented institution. In addition, since the institution was a corporate body, it adopted an uncommonly small-scaled cottage, and developed a management with rich in creativity and strategic flexibility as seen in the invitation of Edward Ransom Johnston as the second superintendent, who was not a physician but an accomplished educator and a trainer for the feeble-minded.

Key Words: The New Jersey Home for the Education and Care of Feeble-Minded Children,
Stephen Olin Garrison, self-support, multi-functional institution,
Education and training oriented institution